

時が経つのは早いもので別冊フレンドという雑誌の差別事件から、まもなく15年になる。みやうち沙矢さんの連載漫画「勉強しませ・STUDYS」の中に「兄貴おるけど、高校中退して家出してからずっと西成住んでるし」というセリフがあって、その西成の注釈に編集者が「大阪の地名。気の弱い人は近づかない方が無難なトコロ」と記述した。これにボクたちが抗議した事件だった。

その抗議集会には、西成区の中学生が多数参加したが、その中でのある中学生の訴えにボクはハツとして、いまでも鮮烈に覚えている。打ち明ければ、その頃ボクは部落解放運動が忙しくて？釜ヶ崎の問題には、いたって評論家だったが、遅ればせながら解放運動の進め方を軌道修正させられた事件だった。

もちろん、ボクの長女が当時中学生で抗議に参加していたこともあったが、事件後の夏、九州への帰省のフェリーで、みやうち沙矢さんと遭遇したのだが、彼女がボクを覚えてくれていて、実に率直な反省と感謝を述べてくれ、好感を覚えたことも、ボクの背中を押した。

その訴えとは、「ボクが大人になったら、道路に寝ているのか、それとも黙ってその横を通り過ぎているのか」というものだった。中学生の「予見



別冊フレンド事件から15年

は的中した。あの時は、漠然とした衝撃だったが、いま問い直してみても、その指摘はあまりに鋭い。

当時の事件への反応と言え、大人達はいつものように「苦笑い」し、中学生は顔色を変えて「怒り」、対照的だった。長い時間をかけた西成への「排除」は、大人達には「いつもの風景」に映り、中学生にはとんでもない「化け物」に映ったということ、いまさらながらに振り返った。

あいりん労働センター周辺の野宿は、西成区全域どころか、大阪全域、そして全国に広がり、「ホームレス」という言葉が定着し、まもなくして「ネットカフェ難民」も出現した。当時の中学生の世代が「寝てる人」になりだした。

「社会的排除」という新たな社会問題は世界に広がり、グローバル経済の中で、学者が比喩する「砂時計」のように、社会は「寝てる人」と「通り過ぎる人」に「分裂」し始めた。そして、西成への「排除」は、このまちをどんどん変えていった。

ボクは、ボクたちの部落解放運動が、「差別」を「静止画像」で見ているのではないかと思った。「苦笑い」はそのせいだった。あのときの中学生のように、差別をもっと「スピード感」を持って、そして差別を「3D」画像のように見直すことが求められてるのではないかと思った。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸話

夫婦善哉

DVD
VIDEO

夫婦善哉



監督：豊田 四郎
原作：織田作之助
キャスト：森繁 久彌
淡島 千景
製作：東宝作品
劇場公開：1955年
モノクロ 131min
収録：東宝ビデオ

法善寺さんの西門前南角に「鳥よし茶屋」という当時はモダンな大衆食堂があった。飲食店舗が並ぶビル地階への階段をおりると、バチを持ったおっさんが立っていて「何人さんであんな〜い！」と叫び、大きな銅鑼（どら）をポーン、ポーンと客の人数分鳴らすのである。我家にとって稀な贅沢だったが親父の家族サービスであった。僕にはミナミ界隈に出かけていくこと、それも「鳥よし」のドラの音を聞くことは刺激的で誇らしげなことであった。10才前後の頃の記憶である。

雪が舞う法善寺の水かけ不動での有名なシーンが「夫婦善哉」という映画の後半に出てくる。その頃の僕は、法善寺さんが「鳥よし」の面前にあったということ覚えていない。しかし、ちょうどその頃にこの映画の看板を見たという記憶がある。成人して初めて大阪の作家織田作之助の作品だと知った映画であった。

「夫婦善哉」の背景は昭和初期で、この頃

「鳥よし茶屋」があったかどうかは知るよしもない。しかし今も残る千日前の「自由軒」や生国魂神社、黒門町界隈、法善寺境内の「夫婦善哉」など大阪の原風景が見られる（但しセット撮影と見られるものもある）。

船場卸問屋の若旦那である柳吉と芸者あがりの蝶子はかけ落ちをして所帯を持つが、甲斐性なしの柳吉は折角貯めた金を使い込んだり、一晩中遊びまくる性癖が直らない。関東煮屋、カフェなどさまざまな商いをするが長続きせず、二人の間には喧嘩も絶えない。それでも、蝶子は柳吉の妻が亡くなると法要してやり、柳吉の娘を引取ると言い、また手切れ金を持ってきた店の番頭に凜として突き返し、柳吉へのまごころをあらわすのである。これら余話の合間に謡や三味が挿入され時代が語られる趣向がいい。また昭和初めの調度や貧しい台所風景が、僕の幼年時代とさほど変化のないことが懐かしい。

世間の酷薄さを悔しがる柳吉をかばう蝶子。「たのんまっせ、おばはん」という男を引受ける女。雪の降る法善寺のぜんざい屋を後にする二人。苦労が続くかもしれない彼らの道行きを、ぜんざい屋のおたやん（お多福人形）が見つめるシーンで終わる。

流暢な大阪弁が交わされ、夫婦善哉というより夫婦漫才の趣を持つこの作品は喜劇だが、しかし、どうにもならない男とこの先の不安を思うとこれは悲劇ともとれる。不世出の天才森繁久彌の軽妙さ、運命を受容する可憐な淡島千景ら二人の自然体が、映画を切実さから救って見事な情話となった。同じ年に撮られ、名作の誉れ高い成瀬巳喜男監督作品「浮雲」とはまさに好対照な作品となった。

hidarimaki

